

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2019 冬号 **89**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集

熊野古道見どころ 整備事業

祓殿石塚遺跡から熊野本宮方向を遠望する（北から）

特集 熊野古道見どころ整備事業

はじめに

熊野古道見どころ整備事業は、和歌山県商工観光労働部観光局振興課と和歌山県世界遺産センターが中心となり、『世界遺産』で和歌山の魅力をアピールすることを目的とした事業の一環として実施しました。熊野古道沿いに新たな見どころを創出するため、平成29年度から3箇年にわたり発掘調査と遺跡整備を行ってきました。

事業の対象となった場所は、熊野古道中辺路のうち、国道311号線から離れ、見どころの周知度の低い中辺路町東部から熊野本宮大社にかけての3箇所です。

1年目は熊野本宮大社から中辺路を北に数分歩いた場所で、性格の不明な塚状の高まり部について調査を行いました。2年目は本宮町と中辺路町の境である三越峠に近い中辺路町側の道湯川集落跡で、熊野参詣の日記に残る湯川宿所跡周辺の状況を確認しました。3年目は、三越峠に近い本宮町側の道の川集落跡を調査しました。

熊野古道とは

熊野古道は平成16年7月7日に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産へ登録され、平成28年10月に一部参詣道の追加登録が行われました。「紀伊山地の霊場と参詣道」は和歌山県を中心に奈良県と三重県にまたがり、「熊野三山」「高野山」「吉野・大峯」の三つの霊場とそこに至る参詣道で構成されています。参詣道は、「熊野三山」への参詣道である熊野参詣道（熊野古道）、「吉野・大峯」と「熊野三山」を結ぶ参詣道である大峯奥駈道、「高野山」への参詣道である高野参詣道があります。

熊野古道は、「伊勢神宮」から紀伊半島東岸沿いを通り「熊野三山」へと至る伊勢路、「高野山」から紀伊半島中央部を南北に縦断し「熊野三山」へと至る小辺路、渡辺津（旧淀川河口にあった港）から紀伊半島西岸沿いを通り田辺へと至る紀伊路があり、紀伊路は田辺市付近で山中を進み「熊野三山」へと至る中辺路と、紀伊半島南岸沿いに進み「熊野三山」

へと至る大辺路に分かれます。

今回の事業では中辺路が対象となっています。中辺路は「熊野三山」へ参詣する道筋のうち最も頻繁に使われた経路で、平安時代から鎌倉時代にかけて上皇を始めとする貴顕が通ったことで知られる熊野参詣の中心の道でした。地道や石畳を敷いた道沿いには、熊野神の御子神を祀った王子社があります。道は台風等の災害によりしばしばルートを変え、王子社の位置を移しながら、現代に至っています。



図1 熊野参詣道・中辺路の位置

祓殿石塚遺跡の調査成果

平成29年12月から平成30年1月にかけて70㎡を対象に発掘調査を実施しました。

調査の結果、塚状の高まりの大部分を占める範囲に近世の石塚遺構が広がっていることを確認しました。また、石塚遺構の下層からは、石列と集石遺構を確認しました。

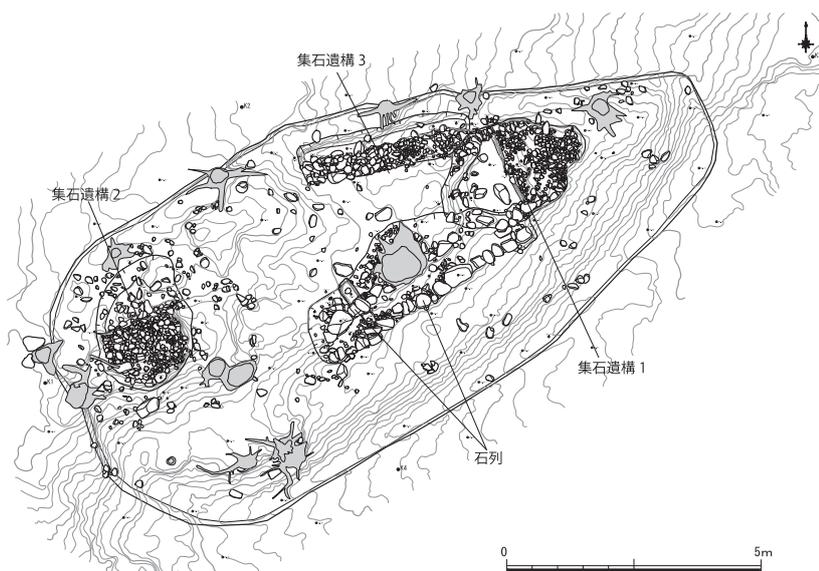


図2 祓殿石塚遺跡 下層遺構平面図

下層で確認された石列は、等高線に沿って長さ約5mと長さ約3mの2本が平行に並んで確認されました。石列周辺に掘方が確認できることから、石列設置に先立ち整地等の地業が行われたものとみられます。掘方からは渥美産の山茶碗底部片が出土していることから、石列の帰属時期は中世の13世紀代と考えられます。同じく下層で確認された集石遺構は、1m×2mの範囲に直径10cm以下の礫を集石した集石遺構1・2と、1m×3.5mの範囲に直径20～40cmの礫を集石した集石遺構3を確認しました。

集石遺構1・2からは、肥前系染付や軒丸瓦が出土しており、18世紀後半頃のものと考えられ、集石遺構3は常滑焼甕が出土しており、中世に造られたと考えられます。

石塚遺構は、4×15mの範囲に直径15cm以下の礫が積み上げられています。礫は砂岩と火砕岩が80%程度を占め、安山岩・石英斑岩・礫岩・花崗斑岩・珪質頁岩・凝灰岩・花崗岩が認められましたが、いずれも熊野川や音無川水系に認められる岩種であるため、石塚遺構周辺の石材により形成されたと考えられます。石塚の中からは、波佐見焼碗のほか、寛永通宝など18世紀後半から19世紀前半の遺物が出土しています。また、石塚遺構上には後世に宝篋印塔笠部が置かれていました。



図3 祓殿石塚遺跡 石塚遺構オルソ画像

祓殿石塚遺跡は、中辺路を歩いてきた参詣者等が、熊野川と熊野本宮大社を初めて眼下に望む尾根筋端部に位置し、中世の段階で石列と集石遺構3を造っており、宗教的な施

設があつた可能性が高いと見られます。また、時期を空けて集石遺構1・2を造り、その後、石塚遺構が形成されたと考えられます。この場所では、参詣者の穢れを落とす行為を行った場所ではないかと窺えます。

湯川宿所跡の調査成果

平成30年11月から平成31年2月にかけて108㎡を対象に発掘調査を実施しました。

調査の結果、中世の2間×5間の掘立柱建物跡や近現代の礎石建物跡が確認されました。

掘立柱建物跡の主軸はほぼ磁北をとり、南に中辺路がとおります。柱穴は直径0.2〜0.3mの円形を基本とし、埋土の堆積状況からは、柱の抜き取り痕跡は確認できず、柱穴の底部に礎石等も確認できませんでした。建物に付随する土坑からは中世末から近世の土師器皿が出土しています。周辺からは鎌倉時代の山茶碗の皿や室町時代の中国製青磁、室町時代から江戸時代の土師器皿、江戸時代の陶磁器などが出土しており、参詣時の宿場や休憩所に関わる建物跡の可能性があります。

礎石建物跡は、短手方向約8m、長手方

向約10mの規模で、平面形は長方形となりま
す。柱基礎とみられる砂岩製礎石を4基確認
しており、一部の礎石には柱あたりが残存し、
一辺4寸の方形に成形された柱を用いたと考
えられます。昭和22年に米軍が撮影した航空
写真には、今回検出した礎石建物跡と同様の
位置で建物が確認できることから、近現代に
建てられたと考えられます。

湯川宿所跡は準五体王子として知られる
湯川王子社に隣接し、中辺路が特に險阻な坂

道に差し掛かる道湯川集落跡に位置します。
この場所は、室町時代に日高郡に勢力を誇つ
た湯川一族の発祥の集落跡として知られて
おり、鎌倉時代や室町時代の日記にも参詣時
の宿場や休憩所として登場します。江戸時代
の紀行文にも記されており、この集落は長く
人々が住み、また参詣者らが行きかっていた
ことがうかがえますが、昭和31年には廃村と
なっています。

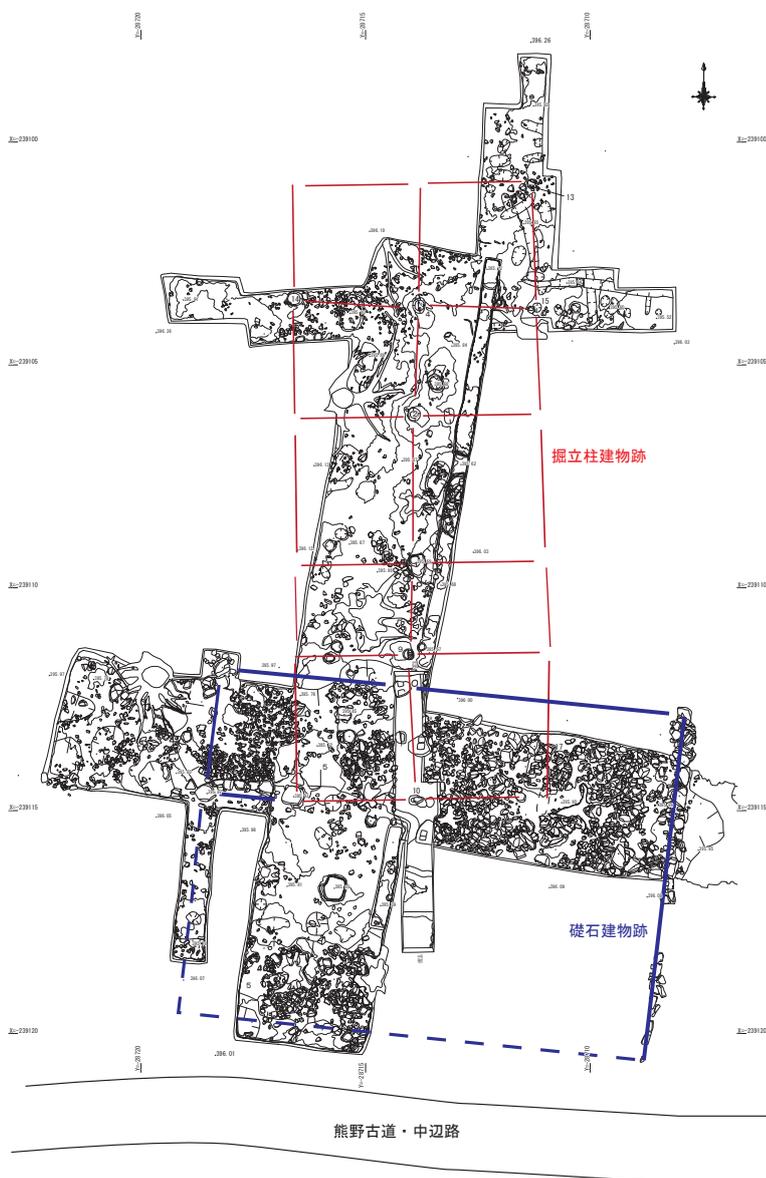


図4 湯川宿所跡調査区平面図

道の川集落跡の調査成果

令和元年10月から11月にかけて約44㎡を対象に発掘調査を実施しました。

調査の結果、近現代の建物の基礎及び礎石を確認しました。また、その建物を建てるために山を崩して谷を埋め、屋敷地を造成した痕跡を確認しています。



写真1 建物礎石・基礎（東から）

道の川集落跡は、湯川宿所跡から三越峠を越え発心門王子を目指して山道を歩いてきた中で急に開ける場所になります。道の川集落について書かれた最も古い史料は天保11年に長澤伴雄^{ながさわともお}によって書かれた『湯峯温泉の日記』であり、集落内では江戸時代後期の瀬戸焼や肥前系陶磁器が採集されたことから、この時期に人々が住み始めたと考えられますが、昭和48年には集団移転し廃村となっています。

各遺跡の整備について

発掘調査後には、すべての調査場所で調査成果を中心とした内容の日本語及び英語の解説板を設置しました。また、祓殿石塚遺跡では、石塚遺跡の復元整備工事と周辺環境整備を行い、宝篋印塔レプリカを設置しました。現地以外に、和歌山県世界遺産センターに祓殿石塚遺跡の模型や宝篋印塔レプリカ、湯川宿所跡の集落模型を設置しています。

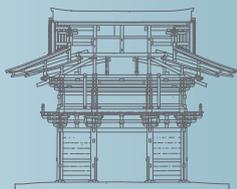
また、世界遺産センターのHP (<http://www.sekaisan-wakayama.jp/learn/index.html>) では3箇所の調査地の解説と、発掘調査時に製作した三次元モデルを順次公開しています。パソコン上でいろいろな角度から



写真2 祓殿石塚遺跡 解説板・レプリカ設置

見ることができるので、是非ご覧ください。
熊野古道に新たな見どころが整備されましたので、熊野古道を歩いたことがない方も、歩いたことがある方もぜひ現地に足を伸ばしてもらえれば幸いです。

(山本 光俊)



阿弥陀寺大師堂の保存修理

東牟婁郡那智勝浦町南平野にある妙法山阿弥陀寺では、昨秋より県指定文化財の大師堂で銅板屋根の葺替修理が行われ、2月に工事が完了しました。

真言宗のお寺である阿弥陀寺の歴史は古く、弘法大師空海が高野山を開く前年の弘仁6年（815）に妙法山で修行し、山腹にお堂を建て、阿弥陀如来を本尊としたことが寺名の由来となっています。



籠堂と石畳（左脇、手前には江戸時代の石標）
昭和8年以前に大師堂が建っていた場所には籠堂が増設されています。



籠堂後方の大師堂（側面の軒を見上げる）
後方へ移設された大師堂の軒まわりは、500年前から大きな解体を受けずに現在まで維持されていました。



修理を終えた大師堂の銅板屋根（奥は籠堂）
屋根中央に乗る鋳物製の露盤に永正6年の刻銘が確認できます。

山門の脇には「ひとつ鐘」と呼ばれる釣鐘（延宝6年・1678）、本堂を右手に見ながら杉木立を進むと、平安時代の「火生三昧」という修行の跡が残り、現在はその周りにアサマリンドウが群生しています。その先に続く石畳を下った場所に大師堂は建ちます。傍に建つ石標には「右ほんぐう・きみいてらみち」と刻まれ、熊野古道「大辺路」の一部として、周辺の石畳は近世の姿を今もそのまま留めています。

大師堂は、屋根の頂点に据えられた露盤

の刻銘などから、永正6年（1509）の建立と考えられています。内陣に安置される弘法大師像はそれよりも古い造像です。かつてはこけら葺きの屋根であったものを、昭和8年（1933）に前面へ籠堂を増設するため後方へ移設した際に瓦葺きとなり、戦後の修理で銅板葺きへと変更されて来ました。

今回の修理中には、絵はがきでも確認できる、昭和8年改修以前の大師堂がどのような姿であったかを調査しました。その結果、戦前の移設時には軒を解体しないまま、上方にある小屋組だけを新調し、その小屋組から軒を吊り込み直す、という大胆かつ繊細な工法を採用したことが判りました。およそ500年前の軒まわりの様相が概ね今日まで維持されていたのです。

今回は維持修理でしたが、いざれ訪れるであろう大規模な修理時に先人たちの工夫や努力も伝わるよう、十分に留意しながら施工に臨みました。

（下津健太郎）

瓦のはなし ③

隅巴すみとま —むしろ主役級—

屋根を見上げて「隅巴」という瓦をまじまじと眺めた事がある：：と云う人は、あまり多くないと思います。隅巴とは、その名の通り軒の隅に葺かれている瓦です。奈良時代には軒巴が使われていましたが、平安から鎌倉時代頃、軒反りが大きくなり、隅専用の軒巴が登場したと考えられています。

お寺などを訪れ、瓦屋根を見上げると、写真1のように、鬼瓦や鯨しやち、留蓋とめふた、さらには様々な文様の軒瓦などに目が行き、なかなか隅巴まで辿り着きません。たまたま下端部分に花の装飾などをあしらった凝った作りのものもありますが、割と控えめな瓦だと思っていました。

ところがある日、そんな思い込みを一瞬で打ち消すような存在感満載の隅巴に出会いました（写真2、3）。

瓦に限らず、時代が下ると共に装飾的になる傾向がありますが、隅に葺かれているにもかかわらず隅に置けない隅巴。こんな思いがけない出会いがあるのも、瓦散策の醍醐味のひとつです。

（松井 美香）



写真2、3 西鳥取観音堂（阪南市）

写真1 護念寺（和歌山市）

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～



ゴミ穴から見つかった土器のかけらや貝殻

和歌山城跡の三の丸にある紀州徳川家の家臣の屋敷地には、当主やその家族をはじめ使用人も住んでおり、生活で廃棄されるゴミも相当多かったと考えられます。現在ほどでないにしろ江戸時代においてもゴミ問題は深刻であったとされています。ただ、三の丸の各屋敷地は広大で、その全体に建物が建っていた訳ではなく、主屋裏側には庭園や畠をはじめ空地うかんちもかなりあったことから、そこに大きな穴を掘ってゴミを処理していたことが分かっています。ゴミ穴からは、瓦や土器のかけら、動物の骨、貝殻などの遺物が大量に出土します。発掘調査で、これらのゴミ穴を掘るとき、つい童謡の「花咲爺」の二番の歌詞が浮かびます。「意地悪爺さん ぼち借りて裏の畠を掘ったれば瓦や貝殻（瀬戸欠け）ガラガラガラ」と。

一番の歌詞に出てくるお宝の「大判・小判」との対比で、二番ではガラクタの「瓦や貝殻」が使われています。ところが、発掘調査ではゴミ穴から出土する瓦や土器類は当時の生活を窺う資料であり、貝殻などの動物遺存体は食生活を復元する資料となります。ですから「瓦や貝殻」はガラクタではなく、お宝と言えます。和歌山城跡でゴミ穴を掘るとき、決して「意地悪爺さん」ではないと自分に言い聞かせて作業をおこなっています。（川崎 雅史）

埋蔵文化財課

ゴミは宝かガラクタか

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2020年冬～2020年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「ハニワと須恵器 ～きのくにの窯跡から見える古墳時代～」
2020年3月21日(土)～2020年5月10日(日)

和歌山県立博物館

- 特集展示「江戸時代の書」
2020年3月14日(土)～2020年4月19日(日)

和歌山市立博物館

- 特集展示「平成30年度寄贈資料展」
2020年3月14日(土)～2020年4月5日(日)

高野山霊宝館

- 冬期平常展「密教の美術」
2020年1月18日(土)～2020年4月12日(日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「祓殿石塚遺跡から熊野本宮方向を遠望する(北から)」
- 2 特集「熊野古道見どころ整備事業」
- 6 文化財建造物課 短信「阿弥陀寺大師堂の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話「瓦のはなし③隅巴一むしろ主役級—」
「ゴミは宝かガラクタか」
- 8 催し物案内



風車89 (2019・冬号)

令和2年2月29日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp